

平成二十八年七月投句

夏祭いつもは見せぬ兄の眉

萍を押しわけ稲株太りゆく

花莫塵の天女とともに昼寝かな

日盛りの鳩電線の一本に

じじと鳴く蝉鶉に捕らえられ

薬塗る夫の大きな汗疹の背

始発出て山あぢさゐの夜明け色

白南風や米寿祝ぐ旅つつがなく

白扇の文字のやさしく形見なる

勝利

斑猫のくるりと誘ふ山稻荷

齡百超えてなほ山笠追ふ男

ベランダに育つ野菜や月涼し

入谷へと朝顔市へと早出して

梅雨雲の垂れ込む寺の雲竜図

羽化すでにし終りし蝉翅濡れて

真理子

由紀子

節子

光子

【お休み】

佳与子